

80デイズ

2004(平成16)年11月7日鑑賞(道頓堀東映パラス)

★★★★



監督=フランク・コラチ/原作=ジュール・ヴェルヌ/出演=ジャッキー・チェン/スティーヴ・クーガン/セシル・ド・フランス/ジム・プロードベント/カレン・モク/アーノルド・シュワルツェネッガー (日本ヘラルド映画配給/2004年アメリカ映画/121分)

……世界文学全集の『八十日間世界一周』といえば少年時代の愛読書の1つ。デヴィッド・ニーヴンが主演し、アカデミー賞5部門を受賞した1956年公開の映画は観ていないが有名なもの。更にその音楽は、今でも常にベスト5に入る映画音楽の名曲中の名曲。そんな名作がジャッキー・チェンらの主演で今風の冒険ファンタジーとして甦った。感動作とはいかないものの、気分転換には十分……。

思い出の少年少女世界文学全集

ジュール・ヴェルヌ原作の小説『八十日間世界一周』といえば、『十五少年漂流記』や『海底2万里』などとともに私が小学生の時、血湧き肉踊らせながら読んだ、たくさんの少年少女用の世界文学全集の中の一冊。

まだ飛行機のなかった時代、人間が空を飛ぶことが荒唐無稽なお話とされていた時代に、80日間での世界一周にチャレンジしたフィリアス・フォッグとその従者パスパルトゥーの姿は、少年時代の私の目の奥に焼きついているものだ。

フォッグ氏が80日間の世界一周に挑むことになったのは、ケルヴィン卿との賭けによるものだが、さすがイギリス紳士は賭けにも度胸がすわっている……？

あの思い出の映画音楽

またこの名作を映画化し、アカデミー賞5部門を受賞したのが、デヴィッド・ニーヴンが主演した1956年の『八十日間世界一周』。

私はこの映画を観ていないが、その美しい映画音楽は心に残るもので、今でもよく聴いている。

あの頃の映画音楽は本当に美しいものが多く、50年近く経った今でも多くの人々の心の中に残っている。そんな名作が今全く新しいイメージで甦ったが……。

『80デイズ』の新機軸は？

この『80デイズ』は、『八十日間世界一周』をベースとしているものの、そのストーリー展開は原作にこだわらず、全く新しい発想で次々と新機軸をうち出している。

その第1は、主人公フォッグ氏（スティーヴ・クーガン）の助手パスパルトゥーに中国人のラウ・シン（ジャッキー・チェン）を登場させたこと。

このラウ・シンがイギリスのロンドンにやって来たのは、故郷のランジョウの村から盗まれイングランド銀行に預けられた翡翠の仏像を取り戻すため、という設定だ。そしてジャッキー・チェンを起用したことに呼応して（?）、ケルヴィン卿と組んだファン將軍（カレン・モク）や黒サソリ軍団というワケのわからない悪役を登場させ、ラウ・シンと激しい（楽しい?）カンフー活劇を展開させたこと。

要するに、基本ストーリーさえ守ればあとは何でもあり（?）の新機軸で、全く新しいアドベンチャーワールドをつくり出したわけだ。

飛行機へのこだわり

ジュール・ヴェルヌ原作の『八十日間世界一周』の小説が新聞に連載されたのは1872年だが、80日間で世界を1周した物語も1872年のこと。

スエズ運河の完成（1869年）そしてインドやアメリカ大陸での鉄道の開通が、80日間で世界一周を成功させた大きな要因だが、この1872年という年は、日本でも新橋―横浜間に鉄道が完成した年でもあることに注目！

このように原作ではもちろん飛行機は出てこないが、『80デイズ』では飛行機への強いこだわりがある。

そのため、フォッグ氏の夢は人間が鳥のように空飛ぶ機械を発明することだし、

パリで知り合った画家志望の美しい娘モニク・ラ・ローシュ（セシル・ド・フランス）の描いた絵は裸の男性が空を飛んでいるもの。

さらにアメリカ大陸で出会ったのはライト兄弟であり、その彼らから見せられた設計図にヒントを得て、最後に大西洋上を蒸気船に乗って進むフォッグ氏が考案したのは、空飛ぶマシーンをつくることだった。

果たしてそのマシーンは本当に空を飛び、ロンドンに降り立つことができるのだろうか……？

シュワちゃん登場！

『80デイズ』では、トルコのハピ王子（？）に扮してアーノルド・シュワルツェネッガーが登場する。シュワちゃんは『ターミネーター』シリーズをはじめ、数々のハリウッド映画に出演してきた大アクションスターだが、2003年11月にはカリフォルニア州知事への華麗なる転身（？）を遂げたことは日本でも有名。

そして2004年11月2日に行われたアメリカ大統領選挙でも、現役の共和党ブッシュ大統領を応援する大物政治家としてその存在感を見せつけたことは記憶に新しいところ。

そんなシュワちゃんが、この映画ではハピ王子に扮して喜劇俳優まがいの演技を披露して、大いに笑いを誘っている。知事に就任する前の最後の作品とのことだが、果たしてシュワちゃんの映画出演はこれがホントに最後になるのだろうか……？

抵抗勢力 VS. 新興勢力

この映画の一方の主人公は、フォッグ氏のアイデアや発明をいつも大言壮語だときおろしているケルヴィン卿。ケルヴィン卿は王立科学アカデミーの長官であり、イギリスのヴィクトリア女王体制下での既得権益の代表者。

19世紀におこった産業革命以降急速に広がった科学を元にした新しいテクノロジーに対して王立科学アカデミーの長老たちは懐疑的であり、そのため結果的に「抵抗勢力」にならざるをえない運命にあった。

その抵抗勢力の代表ともいえるケルヴィン卿は、この『80デイズ』においては、

「1万ポンドの賭け」変じて「ケルヴィン卿のアカデミー長官の地位とフォッグ氏の永久追放という賭け」を成立させながら、その結果をじっと見守るというイギリス紳士らしい振る舞いをせず、積極的な妨害工作を展開することに……。

しかしこれでは、抵抗勢力を越えてヤクザ軍団になってしまうのでは……？

■ホントは友情と愛情の物語……？

フォッグ氏とラウ・シンそしてモニクという3人の珍道中(?)は、パリ→イスタンブール→インド→中国→アメリカ→大西洋と続き、奇妙な空飛ぶ機械でロンドンの王立科学アカデミーの前に到着(?)したものの、残念ながらタイムオーバーとなっていたため、賭けは敗北!

しかし、ここまで全力を尽くしてきた3人の仲間たちには、賭けよりももっと大切なフォッグ氏とラウ・シンとの男同士の固い友情と、フォッグ氏とモニクとの間の愛情が成立していた。

この80日間にわたる世界一周の冒険旅行は、賭けの勝敗も大切だが、3人への友情と愛情を育むために共有された大切な時間だったというわけだ。

■最後の大逆転も科学的……

このように、潔く賭けに負けたことを認めながら、友情と愛情を確認しあった3人の前に登場したのは、何とヴィクトリア女王。そしてそのヴィクトリア女王から発せられた言葉は意外にも……？

発明家であり科学者であるフォッグ氏も、日付変更線という大切なことをどうも忘れていたらしい……。当然こんな映画は、めでたしめでたしのハッピーエンドで終わらなくちゃ!

2004(平成16)年11月9日記